

# I-STEP: 「平和多文化共生」を揚げた国際交流教育

舟 越 耿 一

I-STEP: (International Student Teachers Exchange Program)

Kouichi FUNAKOE

## 1 I-STEP とは何か

I-STEP<sup>①</sup> (アイ・ステップ) という用語が定着してきた。長崎大学教育学部と韓国の漢陽 (ハニャン) 大学校師範大学との交流プログラム: International Student Teachers Exchange Program の略称である。私は日韓学生交流と呼んできたが、多用される言葉に力があるのだといえよう。

I-STEP という交流プログラムは、2003年10月に締結された「長崎大学と漢陽大学校との間の学術交流協定書」と、2004年2月に締結された「長崎大学教育学部と漢陽大学校師範大学との学生交流の細則に関する協約書」に基づいている。形態的には両大学が隔年開講する単位互換の集中講義 (2単位) である。本学部の授業科目名は、長崎開催は「平和多文化教育論 a」、ソウル開催は「平和多文化教育論 b」。

主催校の講義に提携校の最大20名の学生が参加して、日本訪問は7月、韓国訪問は9月とし、9泊10日の期間、日韓の学生が終日行動を共にする。1回目は2004年7月、漢陽大学校師範大学が長崎を訪問、2回目は2005年9月、長崎大学教育学部がソウルを訪問し、以降、長崎とソウルを交互に訪問しあってきた。2010年も7月10日から19日まで長崎で7回目の交流を終えた。大嵐に見舞われ、全員びしょ濡れになって教育学部から附属小学校にたどり着くというアクシデントがあったが、全体としては今回もまた学生たちの満足度はきわめて高かったと総括している。

また、I-STEP の発展は本学部の教員養成制度の改編にも行き着き、小学校教育コース4専攻のひとつとして「多文化理解実践専攻」が設置された。趣旨は「他国の大学生や小・中学校との交流を積極的に行い、この経験を活かした形で、学校教育の中で子どもたちの異文化理解能力を伸ばすことができる教員の養成」を行なうとうたわれている。この専攻は2008年に最初の入学者を迎えたが、ここでは「平和多文化教育論 a」は必修とされた。いまでは「韓国に行けるから本学部に来ました」という新入学生も存在するようになっている。その学生は大学入学前から韓国語を学び始めたと言っている。

カリキュラムの改編で「平和多文化教育論」は「国際教育交流演習」と名称を変えるが、これからの方向性として、I-STEP では隔年20名しか韓国訪問ができないという事情に鑑みて、中国の上海師範大学と韓国の韓国教員大学を提携校とする、現地大学生との交流や小・中学校の訪問、授業参観、教員との意見交換などを行う新たな交流事業を考えている。一回当たり10名程度の学生が数日の範囲で訪問し合うことを構想しているが、すでに交流協定は成立しているので、その具体化が急がれるところである。

このほかに本学部では、「国際学生交流フォーラム」と「日中韓サマー・セミナー」という国際交流事業があり、それらは「グローバル社会に対応できる教員を養成するための多文化理解実践体験プログラム」として、また東北アジア中心の国際交流事業として先進的な企画であると考えているが、本稿では、I-STEPに限定して、その意義を改めて論じておきたい。

## 2 I-STEPの内容

まず、交流授業の内容を時間刻みで示す。以下の長崎大学開催2010年のスケジュール表は、劉卿美准教授（本学大学教育機能開発センター）の作成によるものであるが、劉卿美准教授は平和多文化センター及びI-STEPの中心メンバーの一人として、韓国側との交渉・調整のほか、教室の内外を問わない通訳が必要な全事態、さらには事前・事後指導から報告書作成に至るまで、目配り怠りなくご協力をいただいていた。劉先生あってこそそのI-STEPの現在であるともいえ、ここでも改めて感謝の意を表させていただく。

Schedule 2010

日付	午 前	場所	午 後	場所
7月 10 (土)			16:10 仁川空港出発 17:30 長崎空港到着 19:00 観月荘到着	
11 (日)	10:00 集合（日本側のみ：中部講堂前） エクスカーション 近藤、古賀、舟越、劉 大学出発→10:30 観月荘→12:00 雲仙温泉（九州ホテルにて昼食、入浴。出発まで自由行動） →15:00 雲仙温泉出発→16:00 観月荘→16:30 大学到着			
12 (月)	10:30-11:30 開講式 11:30 大学案内（生協を含め）	SCS 室	13:00-14:10 講義①楠山 「多文化理解教育」 14:30 集合（教育学部玄関：図書館向き） 15:30-16:30 グラバー園 現地解散 （雨天時は長崎歴史博物館）	SCS 室 長崎市 内
13 (火)	9:15 集合（教育学部玄関：図書館向き） 9:45-10:30 授業参観（小）図工 2年3組（松田教諭） 10:50-11:35 授業参観（小）国語 6年1組（常岡教諭）	附属小	14:30-16:00 授業案作成① 小学班、中学班	SCS 室
14 (水)	9:30 集合（教育学部玄関：図書館向き） 10:00-10:55 授業参観（中）英語 1年4組（角屋教諭） 11:05-12:00 授業参観（中）技術情報 1年4組（神埼教諭）	附属中	14:30-16:00 授業案作成② 小学班、中学班	SCS 室
15 (木)	9:15 集合（教育学部玄関：図書館向き） 9:45-10:30 授業実習（小）図工 2年3組（松田教諭） 10:50-11:35 授業実習（小）国語 6年1組（常岡教諭）	附属小	14:30-16:00 講義②舟越「平和教育」 16:20-17:30 授業案作成③ 中学班	31番 教室

日付	午 前	場所	午 後	場所
16 (金)	9:30 集合 (教育学部玄関:図書館向き) 10:00-10:55 授業参観 (中) 英語 1年4組 (角屋教諭) 11:05-12:00 授業参観 (中) 技術情報 1年2組 (神埼教諭)	附属中	14:30-16:00 事後指導・意見交換会 古賀 谷川 16:10-17:10 閉講式 17:30-18:30 交歓会	31 番 教室
17 (土)	9:30 集合 (長崎駅前広場) エクスポージャー 舟越、谷川 長崎駅前広場出発→9:40 岡まさはる記念長崎平和資料館 10:20→ 10:50 原爆資料館→11:50 平和公園→爆心地公園→12:30 現地解散			
18 (日)	自 由 時 間			
19 (休)	自 由 時 間		15:30 観月荘出発 16:30 長崎空港到着 18:30 長崎空港出発	

この授業内容の特徴や意義については、5以下で論じている。

### 3 平和多文化センターの設立

I-STEPの責任教員団は、多文化理解実践専攻教員であり、その中核は平和多文化センター兼務教員である。そこで次にはI-STEPを動かしている平和多文化センターについて確認をしておきたい。

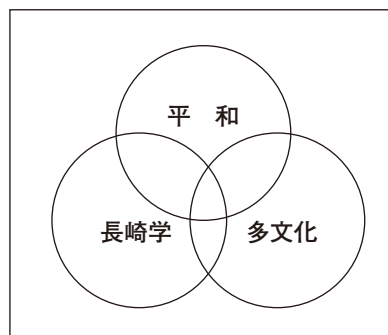
平和多文化センターは、2003年7月、長崎大学教育学部に学部内措置で設立された。正式名称は、平和と多文化共生に関する教育研究センター (Center for the Study of Peace and Multicultural Coexistence)。

○ 当時作成したパンフレットに設立趣旨を以下のように書いている。

「長崎の歴史と文化は、他に例を見ない『平和と多文化共生』の土壌を形成しています。センターは、長崎のこの歴史的・精神的土壌に着目し、これを系統的に学習・研究し、ここからさらに豊かな『平和と多文化共生』のメッセージを発信することを目的に設立されました」

○ 「主な課題と領域」は以下のように例示してある。

- 「原爆被爆関係—平和学の構築」
- 「長崎と対外交流の歴史」
- 「長崎でのキリスト教とその歴史—長崎の宗教や部落問題」
- 「戦争と産業活動 (炭鉱, 造船, 軍需)」「日中・日韓の交流史」
- 「アジア諸国との教育文化交流」
- 「平和教育・多文化共生カリキュラムの開発」



- 「教育」は以下のような活動目標を提示してある。
  - ・ 平和と多文化共生の教育と発信ができる教員の養成を目指します。
  - ・ 「長崎」を系統的に学び、長崎という地域の特性に精通した市民の育成を行います。
  - ・ 教育学部で平和と多文化共生に関する授業を開設します。
  - ・ 被爆体験を人類の普遍的課題として解明・講義する「広島・長崎講座」を開講します。
  - ・ 授業のスタイルは「エクスポージャー」です。
    - 原爆被爆，キリシタン弾圧，西欧文化，中国文化などを「人に会って」「現場に行って」「体で感じて」学ぶフィールドワーク。
    - 中国・韓国の小中学校の授業参観。
  
- 「国際交流」に関しては以下のようにある。
  - ・ 学術交流を結んでいるアジアの諸大学や小中学校と交流を行い、教育分野における多文化共生プログラムの構想と実践を目指します。
  
- 「広報・事業」として、センター紀要の刊行、「参加型ホームページ」の開設をあげ、また市民や学生参加の연구원などの構想も考えたが、実現には遠かった。
  - 平和学や長崎学の登場は1998年改組に始まる情報文化教育課程クロスカルチャーコースと並走し、新しく始まった科目を育てていくという視点があった。「平和多文化共生」という理念のイメージも同じである。

#### 4 中教審答申「国際理解教育の充実」という方向性

他方、中央教育審議会は1996年、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という答申を出していた。この答申は、「これからの学校教育の在り方」として「生きる力」の育成を打ち出し、その具体化の例として新たに「総合的な学習の時間」を設けるとしたものとして記憶されているが、この総合的な学習の時間の例示として最初に挙げられたのが「国際理解」だった。

「国際理解教育の充実」として、以下のようなことが書かれていた。

「広い視野とともに、異文化に対する理解や、異なった文化をもつ人々と共に協調して生きていく態度の育成」、「国際理解教育の推進と体験的な学習や課題学習の重視」、「外国の学校との姉妹校提携や留学など多様な国際交流活動の実施やインターネットなどを活用した国際交流の推進」、「教員の海外派遣の拡充など養成・研修の充実による教員の指導力の向上」。また「外国語教育の改善」という柱も掲げられ、「海外に在留している子供たちや帰国した子供たち、日本に在留している外国人の子供たちに対する教育の改善・充実」も書かれていた。

つまり、平和多文化センターの設立の背景には、一方には中教審答申「国際理解教育の充実」があり、他方には情報文化教育課程クロスカルチャーコースがあった。そうであるがゆえに、平和多文化センターもまた二つの方向性を確認している。

ひとつは、長崎という地域の歴史的、精神的土壌のなかに「平和」への希求と「多文化共生」の実験という他の都市に見られない二つの特性があることを焦点化し、これを系統的に学習・研究して、ここからさらに豊かな「平和と多文化共生」のメッセージを発信していこ

うという方向性であった。もうひとつは、長崎の対外交流の歴史もふまえて近隣のアジア諸国との教育文化交流をすすめる、教育の分野で多文化共生プログラムを構想・実践していくという方向性。

私たちは始めから、この内向きと外向きの二つの「平和多文化共生」を掲げ、それを学習した「平和と多文化共生の教育と発信ができる教員の養成」を考えていたのだといえる。

またセンター設立と中教審答申とI-STEPとの関連について言えば、私たちの日韓学生交流への道程は、1996年中教審答申が「国際理解教育」の奔流をつくり、長崎大学教育学部はその奔流に、平和多文化センターという船で、「平和多文化共生」の帆をあげて、乗り出したということができる。

### 5 「国家の境界を越えての、アジアでの共生」という視点

原爆被爆都市長崎は、あの戦争中、日本有数の軍需工場地帯であった。『長崎原爆戦災誌』第1巻総説編改訂版はこれを「浦上工場地帯」と表現し、三菱製鋼所、三菱造船所、三菱兵器製作所、三菱電機製作所のほか、「これら三菱系工場の協力会社として、中小合わせて百を数える町工場があり、浦上側の中流から河口にかけて一大工業地帯を形成したのである<sup>②</sup>」としている。

1570年開港以来の、世界に開かれた街長崎は、近代化と軍国主義に侵され、侵略と加害の街に変貌していたのである。まさに日本帝国主義の植民地支配と侵略戦争の行くつく先としての原爆被爆であったと言わざるを得ない。その象徴として、朝鮮人被爆者の総数約2万1000人、被爆死者数約1万人という被害の推定がある<sup>③</sup>。

この経緯を長崎大学を例にとれば以下のように語れる。

長崎大学は原爆によって幾多の教職員と学生を失いながら原子野に再建された、世界でただひとつグランド・ゼロにたつ大学である。医学部の前身・医科大学や付属病院は爆心地からわずか500メートルの距離にある。原爆投下のとき五つの講堂で講義が行われていたが、「これら講堂の焼跡から教授は教壇に、学生は座席に着いたままの姿で発見された」受講中の学生約480人のうち65%を占める314人が爆死した。

ところがひるがえって、現在大学本部や教育学部など5学部のある文教キャンパスは、当時東洋一といわれた民間魚雷工場、三菱兵器製作所大橋工場があったところであり、ここでつくられた航空機魚雷が1941年の真珠湾攻撃に使用されたと『長崎原爆戦災誌』は伝えている。ところがいまや長崎の三菱兵器製作所でつくられた航空機魚雷がハワイ真珠湾の先制攻撃に使用され、その報復としての意味も読み取れる原爆攻撃で長崎は壊滅したという脈絡が無視され、長崎という街の加害者性が忘れられつつあるのではないかと懸念する。

私たちは、このような長崎であり、長崎大学であるからこそ、その平和のメッセージの発信も平和教育も、被害と加害の両面を踏まえたものでなければならぬということを主張するのである。

平和多文化センターを設置して「教育の国際化」という課題に向き合ったとき、私たちがまず考えたのは「隣国から始めよう」ということであった。

それは言うまでもなく、戦後半世紀が過ぎても韓国・中国との間の「戦後処理問題」が未解決であることによって、私たちがまた気分の晴れない日々を過ごしていたからである。

「平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしており、『永遠の』とつけ加える

かえってウルサイほどである<sup>④</sup>という哲学者カントの言に従えば、「日韓の間にはまだ和解ができていない」「平和が確立していない」と考えざるをえなかった。

そのような時代状況の中で、平和多文化センターに集まった教員はそれぞれ、近代史の負の遺産を主体的に引き受け、乗り越えるために、また対立・葛藤を和解・友好へと転換するために、政治のレベルではなくて民間で、しかも教育のレベルで何かできることはないかと自問を続けていた。

私たちが「平和多文化共生」の理念を掲げて考えていたことは、ノーベル賞作家大江健三郎の以下のような見識と変わらないと思う。

「共生への志は、日本という国の中での日本人の共生ということでもあるに違いありませんが、むしろ国家の境界を越えての、アジアでの共生ということが主眼をなすだろうと思います。まずそれをしなければ、日本人にとって、世界での共生ということもありえないことは、近代化の始まりから、1945年の敗戦という行き詰まりにいたるまで、非常に血なまぐさい経験を通じて私どもは学んでいます<sup>⑤</sup>。」

## 6 歴史認識の共有をめざす

「国家の境界を越えての、アジアでの共生」は、まさに共生を求めてその国に出かけるのだから、学びの方法はまさに教室を出て、国を出て、現場に行つて学ぶという方法となる。それを私たちは平和学にならって「エクスポージャ」<sup>⑥</sup>と呼ぶことにした。exposureという言葉は「露出する」「人目にさらす」などを意味する言葉で、恥をさらすことも、放射線の危険に身をさらすこともエクスポージャだが、高橋真司は以下のように書く。「戦争と平和の主題について、教室や家庭で、市民運動のなかで、あるいは書物とインターネットから学ぶだけでなく、たとえば、ホロコースト(Holocaust、大量殺戮)に関していうなら、ホロコーストが行われた現場、南京、アウシュヴィッツ、沖縄、広島、長崎などの『現場』に行き、現場の風に自分自身を“exposure”(さらす、暴露)するのである」「私は『エクスポージャ』を『現場の風に吹かれる』と意識した。そうして、これをあえて『現場の風に吹かれる』という受身形で表現するのは、自分の予備知識や思い込み、先入観や予断を捨てて、現場の空気を吸い己を空しくして、事件の全貌、当時の状況に思いを馳せるためである<sup>⑦</sup>」

I-STEPにおいても私たちは、できる限り教室を出て「現場」で学ばせたいと考えている。ソウルで、かつての日本帝国主義による植民地支配の現場として外せないのは、年間5万人の日本人が訪れるといわれる西大門刑務所歴史館である。残虐な弾圧の展示に呆然とするのだが、この事実を知らなければいかなる友好も語れないのだと考える。

長崎では「現場」として、平和公園、爆心地公園、原爆資料館、岡まさはる記念長崎平和資料館を訪れる。爆心地公園では1979年に市民の浄財で建立された長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼碑を訪れ、日韓の学生による献花・黙とうを行う。

原爆資料館の展示は「原爆であつて戦争ではない」という言い方もされ、両館の「歴史と戦争の記憶の仕方」の違いがまた学習対象



になる。岡まさはる記念長崎平和資料館は、企画から運営まですべて完全に市民の手だけで行われ、アジア諸国に対する日本の過去の加害行為と戦後の無責任性を明らかにすることを目的に、侵略と皇民化、強制連行、南京大虐殺、韓国・朝鮮人被爆者、戦後補償などの展示が行われている。

韓国の学生と同行することは日本の学生にとっては決して安易なことではない。しかし、日韓の学生は同行することによって心の痛みを共有しながら近現代史を学習する。

他方また日韓の学生たちは10日間、終日行動を共にする。いっしょに机を並べるだけでなく、いっしょに街を歩き、食事をし、飲みに行く。ソウルの街と長崎の街の空気を吸う。そして若者らしい楽しい時間を過ごす。こんな簡単なことをするのに半世紀以上の時間が必要だったことを不思議に思いながら。

## 7 I-STEPの「主役は学生」

先に「全体としては今回もまた学生たちの満足度はきわめて高かった」と書いた。過去6年間のI-STEPはすべて報告書がある。それを読めば一目瞭然、ほんとうに学生たちの満足度は高い。ある意味理由は簡単である。

I-STEPは、退屈した日常性から脱却し、しかも自分と同年輩の外国人学生・異文化との交流そのものが学習である。しかも教室の講義よりも圧倒的に教室外、学外の行動が多く、しかも「現場の空気を吸い、己を空しくして」というのだから、相当の引っ込み思案でもない限り「楽勝」ではないかと思う。

ところがまたI-STEPは、企画そのものが学生たちの積極的な共同作業なしには一步も動かない内容になっている。学生たちは初対面の日に、4つの授業実習の単位でグループに分かれ、以後グループ単位で行動することになる。2、3ページのスケジュール表でわかるように、授業実習とそこに行くまでの授業案検討の時間が数時間とはってあり、そこでは黙っている訳にはいかない。積極的な意見交換がなければ一步も進まないことになる。

始め学生たちは英語で話しているように見える。ところがそのうち日本語と韓国語の会話になる。どちらの学生のなかにも日本語、韓国語を学び、初心者から中級者、上級者ま



でいることがわかってくる。こうなれば英語はいらない。学生たちは単語帳をつくり、最低限必要な言葉でよく使う言葉を書き留め始める。

始めからこのような結果になることを予想した訳ではない。年を追うごとにこうなってきたように見える。というのも、ひとり相手の言葉が自由になる学生がいると全体の会話がきわめてスムーズにいく。そして、これを経験した学生が来年は自分こそ中心にと考えるようになる、のではないかと考えている次第である。

このような事態を見ているうちに私は「大発見」をすることになる。それは共通語として英語を使うよりは、お互いの言葉を学び合う方がはるかに「平和構築的」であることに気付いたのである。なんと言っても、相手国の言語を学ぶということは相手に対して敬意を表していることになり、相手の気分を良くすることになるからである。簡単なあいさつ

程度でも喜んでもらえることが分かれば、学生諸君は一步一步前進していくことになるのではないかと思う。しかし年齢の壁はなかなかであるとも言っておかなければならないが。

お互いの言語を学び合うということが「平和構築的」であることについて、私は、『I-STEP2009 報告書』のごあいさつで以下のようなことを述べている。

——欧州共同体 (EC) の拡大深化のなかで、多数の言語への分裂が EC の弱点となり、「これまで以上に英語が普及する可能性がある」と危機感が抱かれた。そこから、「EC 域内で多言語使用を促進させること」「域内の青年たちに域内の外国語を二つ習得させること」を目標として掲げ、「これによって域内の言語の多様性を自覚させつつ相互交流を図り、共同体意識を浸透させようとした」という。そして留学制度の拡大とあいまって「EC 自体を母国とする新たな『ヨーロッパ人』の輩出」を言語・文化政策として考えた。(梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ』1993年、岩波新書)

「教師、学生の交流、知識や情報交換の促進、および教育機関の協力体制の緊密化を高めることにより、ヨーロッパ全体で基本となる教育システムをつくり、学術的国境を取り除くこと」を急務とした『ソルボンヌ宣言』と、「2010年までに高等教育における欧州圏を形成し、世界に通用する高等教育制度を確立させる」という目標を掲げ、国境を越えた学生の自由な大学間移動を最大限に促進するための単位相互認定制度の創設などの方策を掲げた『ボローニャ宣言』。欧州統合の高等教育における試みは、まさに I-STEP のすぐ先にある。思索でも行動でも学生諸君の次のテーマだと思う。

『東アジア共同体』はまだ言葉のみがあって中身がない。しかし私たちは、政治より一足先にその試みに踏みだしていると言ってよい。論争的な概念なので十分に議論を深める必要があるが、私たちもいくつかの提言はできるかもしれないと思う。——

日韓共同の学習・行動を通じて、実践に役立つ英語を磨きたいと考えたか、それともお互いの言語を学び合おうと考えたか、学生たちは最新の政治課題の前にいるのである。

## 8 青年たちにこそ豊かな時間を



左の写真は、2010年の長崎での I-STEP、到着2日目、雲仙まで貸切バスでエクスカージョンを行い、昼食を九州ホテルでとった時の「宴会風景」である。もちろんアルコールはないし、宴会などではないのだが、学生諸君の嬉しそうな、楽しそうな顔を見ていて、私が勝手に「宴会」と言ってみただけである。この後かれらは、地獄の散歩を楽しみ、温泉で汗を流して、大学に帰ってきたのは16時だった。何枚かの実に満足

そうな写真がある。私はそれらをパワーポイントに移して韓国で紹介した。帰国後それにキャプションを付けた。たとえば以下のような。「相互理解には時間がかかります」「ゆっくりと新しい歴史ができていきます」「君たちの時間です」「先生たちも少しリラックス」「この写真のほかに“after 5”があります」等々。

ここまでの情報はほとんど最新のものである。しかし2004年の報告書を読み返すと隔絶の観がある。「おわりに—交流プログラムを終えて」に以下のように書いている。9泊10日、



正直に言って修学旅行の引率をしている感じだった。他方いつの間にか国境がなくなり、日韓の学生の区別がつかなくなるほど、予想をはるかに超えた新境地に達した。

「10日朝、日韓の学生たちは文教宿泊所と観月荘前で最後の別れをしたはずだった。ところが続々と長崎空港に見送りに来るではないか。そして日韓の学生たちは手を取り合って涙を流しながら別れを惜しんだのだった。こんな光景を見せられるとは思わなかった。涙に弱い私はもう情景を綴ることができない。私たちとその前の世代が、なかなか乗り越えられない『壁』を学生たちはやすやすと乗り越えて見せたのだ。『しかし、とにかく歩みだそう！新しいページをつくろうじゃないか！』そんな前向きの気持ちとエネルギーをたっぷり味わわせてもらったことは特筆すべきことだった。・・・」

学生たちの交流の空気も始めのころと比べるとだいぶ変わってきたように感じる。例年学生たちは、電子メールの交換を続けているもの、夏休みにソウルに旅行して再会を楽しんだもの、短期留学して単位をとってきたものなどが少なくなく、「やるじゃないか、学生諸君！」という気持である。

確かに、2002FIFAワールドカップ日韓共催や「冬ソナ」が日韓関係好転の転機をつくったように思える。しかしその改善は決して根本的なものではなく、依然として東アジアの政治状況はいつ悪化するかわからない不安定さのなかにあるといえるのではないだろうか。つまり日中関係も含めて東アジアの国際関係は決して手放しで安心していいほど改善している訳ではない。もちろん朝鮮民主主義人民共和国との問題もあり、この側面ではまだ東アジアには戦後と冷戦体制が残っていることが指摘される。そして日本との関係では、基本的に日本帝国主義の植民地支配と侵略戦争の後始末「戦後処理問題」がまだ終わっていないからであると言わざるを得ない。未処理の戦後補償問題はもっぱら裁判所による司法的な解決に依拠するほかに、かといって本格的に「戦後補償」にとりくむ政府をつくることにも展望を見出しえず、逆に教科書問題や靖国問題などが政治問題化しない保証はないと言えるとすれば、この「関係改善」はまだ表面的なものにすぎないと考えなければならない。

「平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしており、『永遠の』とつけ加えるのが、かえってウルサイほどである」という言に従えば、残念ながら日韓の間にはまだ和解ができていないと考えざるを得ない。市民社会のなかには、まだ「憎しみ」や「わだかまり」が残っていると考えざるを得ない。とすれば、「憎しみ」から「わだかまり」までを抱えた民族の青年同士の対話と交流の重要性は強調してもし過ぎることはない。こんな観点から、私は学生たちに、ユネスコ憲章（1945年）から次の言葉を送った。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」

「政府の政治的及び経済的取極のみに基づく平和は、世界の諸人民の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって平和は、失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない。」

では、それはどのようにして可能になるのか。私はそれは言葉や明晰性だけでは不十分ではないかと考えた。「青年たちにこそ豊かな時間を」という言葉はそこから来る。まだ読み始めたばかりなのだが、次の引用は、言葉を越えた「豊かな時間」が大切であることを

理解する糸口を与えている。

「わしにとっては、心のある道を歩くことだけだ。どんな道にせよ、心のある道をな。そういう道をわしは旅する。その道のりのすべてを歩みつづことだけが、ただひとつの価値のある証しなのだよ。その道を息もつがずに、目を見ひらいてわしは旅する」<sup>⑧</sup>

「小さな植物にひざまづき、カラスの声に予兆をききとって畏れるドン・ファンの共感能力があれば、水俣病は起こらなかつたはずだ。人間主義（ヒューマニズム）は、人間主義を超える感覚によって始めて支えられうる。」<sup>⑨</sup>

## 9 平和学・平和教育の再構築へ

I-STEPの活動を通じて、私は多くの言葉（思想）に出会った。ユネスコ学習権宣言にある次の言葉もそうである。

「もし、私たちが戦争を避けようとするなら、平和に生きることを学び、お互いに理解し合うことを学ばねばならない」

「平和に生きることを学ぶ」「お互いに理解し合うことを学ぶ」この言葉を知っているかどうかで人の生き方が左右されるほどの言葉である。しかしまだ「平和に生きる」とはどのようなことが答えられていない。これになんとかシンプルに答えたいと考えていたところ、平和学習にやってきた市内の中学生と韓国からの留学生、スーダンからの教員研修留学生との「出会い」授業で、平和とは「みんながいっしょに生きていけること」、「明日のことを心配しないでいいこと」という名文句が生まれた。前者は韓国人留学生の、後者はスーダンからの留学生の言葉である。それぞれに込められた願いを私たちは理解できる。

これらの名文句を学び、私は私で、新しい平和の意味を「アジアでの共生」をめざした「平和多文化共生」の理念の下で受け止めたとき、「平和は一国では成立しない」という表現が生まれた。平和を一国の安全保障の意味でとらえると「何を言っているのか」ということになるのだが、私たちは「アジアでの共生」「平和多文化共生」を語っている。そうすれば、自分の国だけでなく、相手の国の平和も、つまり両国・両国民とその関係を視野に入れた「東アジアの平和」なくしては自国の平和はありえないことが理解される。これを日本に引きつけて考えると、おそらく日本一国では憲法9条は実現しない。あるいは憲法9条の実現は「東アジアの平和」なくしては実現しないということがいえるように思う。現実としても、思想としても、憲法9条が一国で実現しても即平和とはならない、「東アジアの平和」や「世界の平和」が9条実現の基礎的条件であるといえるのではないか。私たちの平和学や平和教育は、憲法9条で一国だけで日本の平和が成立するように考えてこなかったか反省を求められていると考える<sup>⑩</sup>。

### 最後に。

漢陽大学校を訪問し、教育研究の交流を申し入れたのは2005年2月初旬。それからわずか半年もおかずに学生たちを送って下さった漢陽大学校の金鐘亮総長先生、そして最初の学生を引率し、終始学生たちのそばを離れず、長崎大学側にも寛大に対応して下さったMi-Lee Ahn教授をはじめとする漢陽大学校師範大学の先生方に改めて心からの感謝を申し上げたい。また本学では、I-STEPのレールを引いた橋本健夫前教育学部長をはじめとする平和多文化センター兼務教員の先生方に心からの感謝を申し上げたい。写真を提供していただいた近藤寛教授にも記して感謝の意を表す。

## 注

- ① I-STEPについては、これまで韓国で2回、学会発表の機会を得た。本稿は以下にある2010年10月の基調講演をパワーポイントに落とし、それをもとに新しい論文として書き起こしたものである。

「大学教育における多文化理解教育の推進—長崎大学教育学部の場合」韓国語訳掲載、韓国多文化教育学会『多文化教育研究』第2巻1号、2009年6月所収

「平和は一国では成立しない—『平和多文化共生』を掲げた教育の試み」韓国多文化教育学会・韓国教育人類学会共同学術大会資料集『文化の出会い、教育、そしてアイデンティティ』所収、2010年10月9日、漢陽大学校ソウルキャンパス白南学術情報館中央図書館。

- ② 『長崎原爆戦災誌』第1巻総説編改訂版、2006年、33ページ。
- ③ 岡正治・高實康稔『朝鮮人被爆者—ナガサキからの証言』（社会評論社、1989年）参照。
- ④ カント『永遠平和のために』池内紀訳（集英社、2007年）54ページ。
- ⑤ 大江健三郎「道徳的な態度とよく考える態度」大江他『シンポジウム共生への志』（岩波ブックレット528号、2001年）38ページ。
- ⑥ 岡本三夫「平和学の現在」岡本三夫・横山正樹編『平和学の現在』（法律文化社、1999年）31ページ以下参照。
- ⑦ 高橋眞司「新しい学問・平和学—その定義と技法」高橋・舟越編『ナガサキから平和学する!』（法律文化社、2009年）13ページ。
- ⑧ 真木悠介『気流の鳴る音—交響するコミュニケーション』（ちくま学芸文庫、2003年）034ページ。
- ⑨ 同054ページ。原文はタテ書きで右傍点である。

私たちは、あったことをなかったことにすることはできない。その意味で「歴史を克服する」ことはできない。決定的に重要なことは、その「歴史から何を学ぶか」である。そしてまた憎しみやわだかまりをいかにして小さくしていくかである。

この観点から最近熟読玩味しているのが、真木悠介『気流のなる音』であり、感動したのが、ロバート・S・マクナマラ『果てしなき論争—ベトナム戦争の悲劇を繰り返さないために』仲見訳（共同通信社、2003年）である。

アメリカ人が「ベトナム戦争」と呼び、ベトナム人が「アメリカとの戦争」と呼んだあの戦争について、マクナマラとポー・グエン・ザップという「当時の敵対者同士が過去に遡って過去の紛争を見直す」同書44ページ、という試みが行われたことに私は大きな驚きと感動と希望を見出した。ベトナム反戦運動世代としては実に格別のものがある。

私たちは、「漢字文化や儒教の伝統を共にする、いろいろな面で似通った点の多い、隣同士のこの二つの国民は、なぜこんなにうまくいかないか」（永積洋子『鎖国を見直す』（山川出版社、1999年）という「非常に素朴な疑問」にどう向き合い、刺さったままの刺をどうやって抜いていくかということに誠心誠意たらざるを得ないのだ。

- ⑩ 「平和は一国では成立しない」という表現を手に入れるまで、姜 尚中編『ポストコロニアリズム』（作品社、2001年）から多くを学ばせていただいた。